

ミラーを拭く男

迷う年齢であつた

過去に物差しを当て

未来に影を見る年であつた

還暦が近付いていた

カーブミラーの曇りが

一瞬の判断ミスを呼び

自転車の少女を引つけた

運良くかすり傷ではあつたが

男は口をきかなくなつた

現場にお百度を踏み

角度を変えてはミラーを観察した

高い脚立を手に入れボロ布を用意した

窓ガラス拭きもしなかった男が

沈黙を鏡面に押し付ける様に

暗くなるまで磨き続けた

男には美しい妻がいた

豊かな未来を背負った息子がいた

父の気持の良く分かる愛くるしい娘がいた

玄関には少女の父親の声が毎日響いた

望みは金のようにであった

父は家族を避け、自室で頑なに沈黙した

男には家族も家計も家も将来も見えなくなっていた

カーブミラーと自分の生きるための道と

心の鏡のみが大きく広がり

その幻想は日本全国のミラー拭きの

イメージを描き出した

長距離用の自転車に跨り

後に大きな脚立を載せて

男は自分の残りの人生に漕ぎ出した

北海道に散在する無数のカーブミラー

そして日本中の気の遠くなる程のカーブミラー

その一つ一つに自転車を止め脚立を立て鏡面を磨く

風の日も雨の日も黙々と鏡を磨く

作業中に事故にも遭い入院もした

家族が駈け付けて複雑な対面もした

でもベッドから降りるとまた自転車に跨った

物好きな戦友も現れ、力を貸すと申し出た

男は無表情でそれを迎えた

メディアも取材に現れた

行く各地で名前を呼ばれ「有名」になったが、

男の無表情は続いた

援助のユニフォームが出来

自転車隊が全国で動き始めた

それでも男は孤独だった

独りでペダルを踏みミラーの前で止まり

鏡に息を吹きかけた

自分の過去と未来を積分するような

形而上の無表情を続けて

鏡があれば立ち止まつて脚立を立てて鏡を拭いた

自分の心の鏡を捜し歩きそれを磨き上げる様に

美しい妻が夫の狂気に満ちた余生を助けようと

車の免許を目指し教習員に口汚く罵られて

いるのも知らず

ただただカーブミラーを探し求め鏡を拭き続けた

支援運動の自転車部隊にも近付かず

男はこの世に存在するすべての鏡に

息を拭きかけその奥にある何かを

残りの力を振り絞って磨き続けるのだった

2007.9.17

緒形拳と栗原小巻の「ミラーを拭く男」を観て